

氏名	アルカディリ モニラ
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	博美第302号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉 THE TRAGEDY OF SELF SERIES (自己という悲劇) 〈論文〉 THE BEAUTIFUL SADNESS -The AESTHETICS OF SADNESS IN MIDDLE-EASTERN THOUGHT (悲しみの美しさー中東思想における悲しみの美意識について)

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	伊藤俊治
(論文第1副査)	多摩美術大学	〃	( 〃 )	港千尋
(作品第1副査)	東京芸術大学	〃	( 〃 )	渡辺好明
(副査)	東京芸術大学	准教授	( 〃 )	小谷元彦

(論文内容の要旨)

幸せを願う気持ちは誰もが持っている。幸福とユートピアの追求は何千年もの間続いて来た永遠の旅である。生きている時間が幸福で生活が満足した状態にある事を人間は絶えず切望して来た。しかし、我々の現実をこの一面的な「幸福な実存」に凝縮してしまう事は可能なのだろうか？実は我々の感情の変動そのものが人生を豊かにし、多様性を生んでいるものではないのだろうか？精神分析の影響を強く受けた20世紀において、人の苦しみや悲しみを病として捉える見方が強まった。人々は以前にも増して幸福感を激しく追い求めるようになり、幸福以外の感情を悲観的に考え、隠すようにもなった。そしてその見解は芸術のあり方や見方さえも変え始めたと私は感じている。

私はこうした考え方とは対照的に、悲観的な感情と呼ばれているものが実は啓発のための確実な手段であるという事を主張したい。アーサーミラーが言うように、我々が知っている最も偉大な真実の多くは苦しんで来た人達の中から生まれている。苦しい時や悲しい時に初めて見える世界が人間の心には存在すると思う。捉え方がいくらネガティブなものであったとしても、それらの悲観的な感情の中に審美的な価値を見出す事によって、我々が豊かな精神生活に近づく事が出来ると私は信じている。

この美学を確立させるために、私は自分の出身である中東の思想に内在する独特の「悲しみの美意識」を紹介するアプローチをとっている。この美意識は中東文化の真髄を形成する部分だと考えており、伝統、文学、芸術、宗教といった様々な側面で目にする事が出来る。従って視覚的表象だけに限らず、あらゆる観点からこの美意識を考える必要があると感じた。即ちこの論文は従来の芸術論というよりは、文化をアートとして考える見方を基本にしていると言って良いと思う。悲しみの美意識が最も普及しているアラビア、ペルシャ、トルコの文化を主な論考の軸にして、それぞれの地域からいくつかの事例を取りあげて論を展開させている。実際に自分で様々な国に行きフィールドワークをし、撮影や取材を行った中で発見した事象を多く取り入れている。

宗教の観点から特に注目したのはイスラム教の宗派の中で特にエソテリックな素質を持っているシーア派と、イスラム神秘主義(スーフィー)の儀礼と思想である。シーア派の信者は新しい年の始めに「アーシューラー」と呼ばれる葬儀の祭を行い、10日間ものあいだ繰り返し体を鞭打ちし、特別な集会所等で集まり、一斉に泣き続けるのである。この哀悼行事には様々な意味と意義があり、個人の枠を越えた共有された悲しみの代表的な象徴として考える事も出来る。イスラム神秘主義者スーフィーの人たちは

更に深いレベルで悲しみを追求し、自己意識がある限り人は神と一つになれないという一元論的な思想を持っているため、その罪である自己意識を払拭出来なければ人は悲しみ苦しまなければならないと信じている。また、800年もの間行っている旋回舞踏もそういった思想から発生した哀悼と悲しみの舞であり、一種の確立した芸術なのである。

それらの宗派や地域においてこのような美意識が生き延びた背景にはいくつかの理由があるが、その原因を出来る限り論述の中で解説している。というのも、この倫理はうまく描写する必要があるばかりでなく、今日のグローバルな風潮と共に消えていってしまう恐れがあるので、ここで強く主張する必要があると考えたためである。

作品制作において私は研究から得たあらゆる着想を混合させて、ナルシズムと悲しみの関係性や、エソテリック・アートの可能性を追求している。作品シリーズ「The Tragedy of Self」（自己という悲劇）では、悲しみの深層的な解釈の一つである「自己を哀悼する」という事に類似した空間を築き上げ、視覚的表象を用いて悲しみを表現する方法を編出している。

#### （博士論文審査結果の要旨）

アルカディリ・モニラの博士論文はイスラム化される以前の中東世界の根源的な美の感情や精神性へ独自の視点からアプローチしたものであり、そうした根深い悲しみの美意識が実は現代においても様々な形で生き延びていることを現代美術や写真映像から音楽演劇や舞踏儀礼までに渡り、詳細に論述したものである。論考は大きく4章に分けられ、それぞれの構成、論述の進め方、細部と全体の照応等もよく考えられていて、問題はない。忘れられた美意識を、芸術、宗教、歴史、文学といった様々な角度から検証し、その核心を明確に表現しえていると言えるだろう。以上の観点から本論文は学位授与に値すると認め、合格とする。

#### （作品審査結果の要旨）

アルカディリ・モニラ作品「自己という悲劇」は、幸福追求を至上とし、喜び以外の感情を負と位置づける現代人の一般的な人生観に対する疑問を起点として制作された。これは自身の成長過程で無自覚ながらも身を浸していたイスラム文化の特性に依拠するものであるが、15歳で祖国を離れ改めて見出すこととなった悲しみの美しさについての内面的／外在的視点からの深い探求姿勢は作品の自律性を獲得している。性差を飛び越え、自らの身体をエソテリックな図像に投入し、写真・映像によって固定した方法論は、悲しみの感情における審美的な佇まいと死の永遠性への言及にも成功している。以上の理由から学位授与に値すると考え合格とする。

#### （総合審査結果の要旨）

アルカディリ・モニラは15歳の時に日本にやって来て以来、10年間に渡り、日本文化とイスラム文化を平行的に見つめる興味深い表現活動と研究を精力的におこなってきた。近年はアニメーションや写真映像から、空間全体をひとつの“情動の場”とするようなインスタレーション作品を日本、アラブ諸国、ロシアなどの個展企画展で発表してきたが、博士論文及び博士作品では、自己のルーツと言うべき、イスラム化される以前の中東世界の根源的な感情や思考に新しい光をあて、その独自の美学や美意識の所在を明らかにしようとしている。

21世紀に入り、イスラム圏のアートが活性化し、ドクメンタやヴェニスビエンナーレといった大型国際展においてイラン、イラク、シリア、パレスチナ、レバノンなどのアーティストたちが大きな注目を集

めているが、いずれも自らの国の歴史と文化の制度を対象化してゆく独特のアプローチを見せている。モニラの博士作品及び博士論文はこうした世界的な動向と共振するものであり、世界で活躍するイスラムの作家たちと比べてもそのクオリティや精度は高く評価できるものである。今後、世界的にもますます活躍が期待されるだろう。以上の観点から審査委員会のメンバーによる協議の結果、合格とする。